



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第8号(R4. 5. 11)

体育祭ブロック長のメッセージ

ブロック長のメッセージの最終回となりました。
体育祭はいよいよあと10日後です。

【白ブロック 満川 脩さん】

こんにちは。この度、白ブロック長になりました満川脩です。僕は、今回の体育祭が全学年の人に最高の体育祭だったと思ってほしいです。まずは、この状況の中で体育祭が行えることに感謝したいと思います。そして、盛り上がりを見せ、最後には感動の待っている体育祭にしていきたいです。そのためには、まずブロック長が先頭に立って誰にも負けないくらい声を出し、白ブロックの総合優勝、ブロックコンクール金賞に向かって白ブロック全員で頑張ります。よろしくお願いします。

【白ブロック 権田 花音さん】

こんにちは。白ブロック長になりました権田花音です。今回の体育祭は、一人一人が考えて行動したり、お互いに良い所やより良くするためのアドバイスをしたりして、個人としても団体としても成長できる体育祭にします。そのためには、リーダーや長だけでなく、学校全体で高め合い、一致団結して頑張っていかなければなりません。だから、まずは私が周りを見ても的確な指示を出し、それを他の人にも伝えていきます。みんなで頑張るって今までで1番いい体育祭を創っていきましょう！よろしくお願いします。

【桃ブロック 月川 柚希さん】

こんにちは。この度、桃ブロック長になりました月川柚希です。自分は、この体育祭を651人全員が「楽しかった」「最高の体育祭だった」と言って終われるような体育祭にしたいと思います。そのために、ブロック長やブロックリーダーが積極的に指示を出したり行動したりしていくことが必要であると考えます。最後まで責任を持って桃ブロックのために尽くしたいと思います。学年関係なく桃ブロック丸となって頑張っていきましょう。

【桃ブロック 柳 結梨さん】

こんにちは。桃ブロック長になりました柳結梨です。自分達で、最高の思い出に残る体育祭をつくりたいです。コロナ禍で様々な事が制限される中、体育祭が行えることに感謝し、限られた時間の中で計画性をもって頑張ります！！また、きついときこそ声をかけ合って、桃ブロック全体が良い雰囲気になれるように、たくさん盛り上がっていきます。桃ブロック総合優勝はもちろんですが、笑顔あふれるブロックにできるように、しっかり役割を果たしますので全力でついてきてください！！

名刀「正宗」が残した美の世界と考え方 ～正宗が後継者選びで考えたこと～

世界の人々が賞賛する日本の技術はたくさんある。その中で、数百年にわたって評価されてきたものに「鍛冶（かじ）」の技術がある。特に、刀づくりは世界最高峰である。その中でも、鎌倉時代末期に活躍した「正宗」のうった刀は名刀中の名刀である。今から700年前に作られた名刀が数十振り残されている。

正宗は、自分の技術を継承するためにたくさんの弟子たちを育てた。その中から跡取りを選び秘伝の技術を一人に伝授しようとした。最終的に二人に選ばれた。村正と貞宗である。正宗には一人娘がいた。名を「たがね」と言った。この二人のどちらかをたがねのむことし、跡継ぎにしようとした。



正宗は、この二人に最終審査として、それぞれ一振りの刀をつくらせ、優れた刀をうった方を後継者にすることにした。やがて二人は懸命に刀を鍛え、正宗のところに持って行った。

正宗は、小川のせせらぎに2本の刀を入れ、柄（つか）の方を川底に埋めて刀を立てた。上流からまず村正の刀に向けて木の葉を一枚流した。木の葉はせせらぎに揺れながら村正の刀にまるで吸い寄せられるように寄っていった。すると、刀にふれるかられないかという瞬間、木の葉は真っ二つに切り離された。

次に、貞宗の刀である。正宗は同じように木の葉を手から離した。木の葉は貞宗の刀に流れ着いた。しかし、刀身に引っかかり切れずに水の中がかすかに動いていた。正宗は、貞宗の刀に近寄り流れから刀をゆっくりと引き上げた。すると、引っかかっていた木の葉ははじめて切れて流れていった。

村正は、勝利を確信した。たがねと結婚し、師匠の跡を継ぐのは自分しかないと思った。

しかし、たがねと結婚したのは貞宗の方だった。正宗は、貞宗の刀の方が優れ、後世に残す技術だと判断した。

村正は、この判定に腹を立て、師匠のもとを離れた。諸国をまわり、各地で刀を残した。後の世に、村正の刀は「妖刀（ようとう）」と呼ばれる。刀を鞘（さや）からはらって見つめると、なんとなく人を斬りたくなるそうだ。徳川家康の父と祖父も村正の作った刀で命を落としているため、江戸時代にそうした伝説が伝わったのかもしれない。

さて、正宗はなぜ貞宗の刀に軍配をあげたのだろうか。村正の刀は斬ろうとしなくても斬ってしまう。貞宗の刀は斬ろうとする人間の意思を働かせてはじめて斬ることができる。これこそが、武士の持つ刀であると正宗は考えたのではなからうか。

鎌倉時代末期、元寇（モンゴルの襲来）のあと、日本では優れた刀が大量に必要とされ、産地も増えた。この情勢の中で、こう考えたのではないだろうか。武・武道・武士の使う刀は、人を斬るためのものではない。争いを止めるためのものである。なぜなら、「武」という漢字の成り立ちは、「矛（ほこ）」を「止める」と書かれている。人と人の争い、国と国との争いを止めるために武があると考えた。つまり、刀をはじめ武器はそのためにあるのだと。人間がもつ刀はそういうものでなければならない。斬ろうとすれば斬れるが、斬ろうとしなければ斬れない。村正の刀は切れ味が鋭い。斬ろうとしなくても斬ってしまう。一方、貞宗の刀は、人間の意思によってしか斬れず、しかも争いを止めるためのものとなりうると考えた。正宗はそう考えて貞宗を後継者として選んだのではないだろうか。

700年の時を経て、名刀正宗は日本人だけでなく世界の人たちに愛され、神秘的な世界を伝えてきた。刀の持つ美しさだけでなくそうした背景によるものだろう。若い人たちに日本の伝統美の世界とこうした考え方を知ってほしい。